

連載 プロマネの現場から
第103回 「関ヶ原」の夢の跡

蒼海憲治 (大手SI企業・金融系プロジェクトマネージャ)

先日、岐阜県養老町にある養老天命反転地という公園へ遊びに行く機会があり、そこで反転地と呼ばれるとおりの不思議な感覚を愉しみました。その後、ここからほど近い場所にあり、また、かねてから訪ねてみたかった関ヶ原の古戦場に足を運び、400余年前の天下分け目の合戦に思いをはせました。

今年のNHK大河ドラマ『真田丸』は、主役の真田信繁(幸村)を演じる堺雅人さん、信繁の父・昌幸役の草刈正雄さんらの好演に加え、テンポのいい三谷幸喜さんの脚本とあいまって楽しいドラマになっています。このドラマの中盤の山場が、「関ヶ原」であり、この合戦を境に、真田親子の運命も激変するため、ドラマ開始当初より、どのように描かれるか興味津津でした。・・はたして、ご覧になった方も多と思いますが、なんと戦国時代のラストを飾る天下分け目の合戦は、わずか1分足らずで描かれました。ネットでは、「超高速関ヶ原」という言葉でも表現されています。本作、徹底して真田親子の目線で描こうとしていることもあり、関ヶ原前夜、信州・上田城で徳川秀忠の軍勢を足止めしていた真田家にとっては、あつという間の敗戦の報だったのだらうと思います。

『真田丸』の趣向に感心しつつも、やはり関ヶ原の合戦の描写については、ちょっと欲求不満になりました。そこで、類書や他のドラマをいくつか目にしました。関ヶ原の合戦の様子については、様々な小説やドラマに描かれていますが、私の中のイメージは、司馬遼太郎さん作の小説『関ヶ原』であり、この原作を基に、1980年のお正月にTBSが開局30周年記念として制作したドラマ『関ヶ原』です。

つわものどもが夢の跡を見ながら、この地形で、当時の東軍と西軍の布陣の配置を確認する中で、明治期に軍事顧問として来日したドイツのクレメンス・メッケルと同じく、普通に戦闘できてさえいれば、西軍が負けることなど決してなかったらうに、と思いを新たにするのでした。また、それと同時に、西軍に満足に戦闘させないように、戦闘以前に西軍の両手両足を縛るよう、うつべき手をすべて打っていた徳川家康の手腕への凄みも感じるのです。

すなわち、体制面では、秀吉子飼いの大名を味方にする。西軍総大将の毛利は、戦場に来ない。それを見越して毛利の部下を内通させ、封じ込める。

また、秀頼が戦場に出てくれば、いったん背を向けた秀吉子飼いの武将たちも、弓を引くことができなくなり、また西軍の士気も大いに上がったであろうに、そうならず。そうならない淀殿の性格を知っていたのかもしれない。

現場での戦闘が、関ヶ原の表の顔であるとすれば、戦闘以前の謀略や裏切りは、関ヶ原

の裏の顔になります。そして、この裏の顔こそが、戦術であり、さらには決戦を制した後の新しい天下の形勢を見据えた戦略になります。東軍を率いた徳川家康には、戦略も戦術もあったと思いますが、西軍の石田三成には、豊臣政権を守ろうとする、やむにやまれる思いはありましたが、そのための戦略や戦術は乏しかったのでは、と思えます。

しかし、この思いこそが、三成の残した貴重な財産だったのではないかと、思います。そして、この思いは、感化力が非常に強いものでした。

「治部少（三成）に過ぎたるものが二つあり 島の左近と佐和山の城」という言葉が残っていますが、これは石田三成には、身分不相応なものを二つ持っていて、それは家臣の島左近勝猛と佐和山城の二つを指しています。島左近は、三成に召し抱えられる前、主家が代替わりし、領民に圧政を敷いたのを見て隠棲していたといえます。この左近に対して、自分に武が足りないことを自覚していた三成は、自身の禄高4万石のうちの約半分を与えて召し抱えます。また、自分をここまで高く評価してくれた三成に対して、島左近は最後まで忠義を尽くします。

また、西軍の仲間作りの中で、三成の「義」に意気を感じて殉じたのが、大谷吉継でした。大谷吉継は、豊臣秀吉が生きていた当時、「あの大谷に百万の兵の采配をとらせてみたい」といわれたほどの武将であったのですが、この大谷吉継でさえ、天下の形勢は徳川にあり、と判断し、いったんは徳川方につきます。

しかし、ある日のお茶会の様子を思い起こします。大谷吉継はハンセン氏病を患っており、既に目も見えなくなっています。この茶会において、吉継が飲んだ茶碗を、他の武将は嫌がって誰も口をつけません。そんな中、三成だけは口をつけて飲み干します。

そのことを思いだした瞬間、吉継は、三成方へつくよう翻意します。

「三成、わしもおぬしも目がもう見えぬ。

目が見えぬ同士のよしみじゃ。この命くれてやる。受け取れ。」

と、とつても男気を感じるシーンがあります。

関ヶ原の合戦に勝利した後、家康が家臣の本多正信につぶやくセリフがあります。

「豊臣家子飼いの大名達、ああも無節操に裏切れるものか。

喜ぶ反面、心が冷えたわ・・・」

家康自身が行った裏切り工作であり、謀略でしたが、甘言によって、秀吉恩顧の武将たちが、いとも簡単に次から次へと転びます。その中で、佐和山19万石の三成が、大々名

の250万石の家康に、秀吉への「義」の心で立ち、最後まで「義」を貫いた。さきほどの言葉はこう続きます。

「せめて三成のような家臣がいて、太閤殿も初めて浮ばれたであろう・・・
これからは我が徳川家、三成のような家臣に恵まれれば良いが。
義、忠義の家臣にのう。」

三成の秀吉への「義」があり、島左近の三成への「義」があり、吉継の三成への「義」がある。

子供が親の寝首を搔き、兄弟で相争った戦国時代と異なった武士像が生まれたのが、徳川三百年ですが、この礎に、三成の義があり、それが武士道の倫理へ影響を与えたのではないか、という仮説は、真偽のほどは定かではありませんが、感動するエピソードです。

関ヶ原の合戦後、三成は「人の心計り難し」という言葉を残しています。計算の得意だった三成が、人の心を読み違える様子が、ドラマの中にも随所にでてきます。現代から見ると、秀吉恩顧の武将たちが裏切ることを想定さえしなかった様子が不思議にも思えます。

合戦の勝敗を決した小早川秀秋の裏切りに続いて、日和見した朽木元綱、小川祐忠、赤座直保、脇坂安治が東軍に寝返り、小早川の裏切りに備えていた大谷陣に殺し壊滅させます。

ところで、合戦後の処遇をみると、面白いことがわかります。脇坂だけは所領安堵されますが、他の三将は減封やお家取りつぶしなど厳しく処分されています。家康は、日和見してその場で裏切った武将を罰しているので、脇坂だけが最初から寝返ることを伝えていたのではないかとされています。合戦前に、調略や謀略をつくした家康ですが、火事場泥棒をするような不義理な人物を嫌っており、忠義の家臣を重んじていたのだと思います。

失敗プロジェクトの要因の一つには、プロジェクトにかかわるメンバーを始めとするステークホルダーとの意識がバラバラであることがあります。

プロジェクトが失敗することで利益を得る反対勢力をいかに封じ込めることができるか。プロジェクトの推進と並行して、反対勢力を棚上げする工夫が重要になります。それができていないと、プロジェクトの終盤においても、足元を救われることとなります。

プロジェクトの初期において、合意形成がうまくいかなかった場合であっても、継続して味方作りをする必要はあるし、また、反対勢力をも感化する熱い思いは、プロジェクト活動のベースにあるべきでは、と思っています。